平成２４年度国立天文台研究集会開催報告書

平成　24年　9月　3日

国立天文台長　殿

代表者	氏　名	（ふりがな）ひろい　かずお 廣井　和雄		
	所属・職	京都大学大学院　理学研究科　博士課程3年		
	電話	075-753-3907	E-mail	hiroi@kusastro.kyoto-u.ac.jp
研究集会名	第42回天文天体物理若手夏の学校			
開催期間	平成24年　8月　1日　～　平成24年　8月　4日			
開催場所	〒913-0048　福井県坂井市三国町緑が丘4丁目4-8　三国観光ホテル			
参加人数	406名　（一般参加者　382名、　招待講師　24名）			

研究集会の概要

天文天体物理若手夏の学校は、天文学・天体物理学を研究する若手研究者のために毎年開催されている研究会である。第42回の夏の学校は、8月1日から4日の3泊4日の日程で、福井県の三国観光ホテルにて開催された。夏の学校の運営は若手研究者が担っており、第42回の夏の学校は京都大学・総研大・鹿児島大学・熊本大学・九州大学・愛媛大学の大学院生が運営を行った。

夏の学校は日本国内の若手研究者に研究発表と交流の場を提供することによって、研究・研究発表能力の向上、若手研究者の交流促進、研究会運営の経験を積むこと、の3つを主な目的としている。これらの目的を達成するため、下記に記す分科会・企画を開催した。特に研究の向上に関しては、若手研究者が特定の領域に捕らわれない幅広い視野と知見を得るために幅広い分野からの発表のある研究会にし、最先端の研究に触れて新しい知識を増やし刺激を受けるために各分野の第一線で活躍されている研究者を招待講師として招いて講演をしてもらった。

1.分科会

研究分野ごとに、「重力論・宇宙論」、「コンパクトオブジェクト」、「宇宙素粒子」、「太陽・恒星」、「銀河・銀河団」、「星間現象」、「星形成・惑星系」、「観測機器」の8つの分科会により構成された。各分科会内では、参加者による口頭発表、ポスター発表、招待講師による招待講演が行われた。

2.全体企画

全体企画は事前に公募で内容を募り、「みせてもらおうか、修士・博士の実力とやらを？」というタイトルのもと、大学院の在り方についてパネルディスカッションを行った。

3.懇親会

他の参加者や招待講師の方々と交流する機会を用意することで、共に研究をする仲間を増やし、研究意欲を高めることを目指した。

研究集会の成果	今年度の夏の学校は、招待講師24名を含む合計406名の参加者を迎えて開催された。3泊4日の合宿形式を通じて、参加者は開催期間中に講演や議論、交流を行うことができた。アンケートの結果、事務局の案内や開催時期、開催日程、合宿形式、講演予稿集、セッション会場、宿泊設備に関し、おおよその人に満足してもらえた。また、食事に関しては不満の割合が多かったりと、400人規模の運営の難しさを知った。参加者の参加目的は、発表や交流、情報収集といった回答が多かった。参加した意義は、自分の研究の進展や、全国の若手研究者との交流が多く、具体的にはモチベーションの向上や他分野への興味・知識を得た、発表の経験が積めたといった回答が多かった。 夏の学校で行われた分科会・全体企画は、いずれも盛況であった。口頭発表は215件、ポスターセッションは112件と、多くの若手研究者が発表と議論の場を持つことができた。招待講師の方からも興味深いお話を伺うことができ、今後の研究活動に有意義なものとなった。今年度は分科会の分野内容による分け方を重視し、分科会の区分けに若干の変更を施した。この変更についてアンケートをとった結果、81%の人から適切との回答を得た。また今年度は、公募企画で落選した重力波検出の団体からの申し出により、ポスター会場に展示ブースを設けた。展示ブースを来年以降も設けるか否かについては、4%の反対に対して52%の賛成が得られた。個別の意見には、わかりやすい、おもしろい、興味をそそるといった意見が多かった。全体企画ではそれぞれ異なる立ち位置に立つ3人の招待講師を招き、白熱した議論が展開された。アンケートのコメントには、非常にためになった、考えさせられた、おもしろかった、という意見が多数寄せられており、分科会の枠を越えた全体で話し合う講演は有意義であったといえる。 今年度は主催団体である若手の会事務局と協力し、参加費の差別化を試験導入した。これは、若手の会の会員の参加費を非会員に比べて1000円安く設定することにより、若手の会の利益を守り、同時に天文天体物理の若手研究者のコミュニティである若手の会の会員増加を図るためである。その結果、当日の加入者を含め、若手の会会員の参加者は9割以上になった。アンケートでは、来年度以降も参加費差別化を実施すべきかについては64%の賛成が得られ、1000円という金額についても適切であるという回答が71%を占めた。 夏の学校期間中に行われた若手の会総会では、ますます大規模になりまた質の低下を指摘されつつある夏の学校のこれからの在り方・存在意義について議題が出された。参加者全員がこの問題について考え、意見を出し合った。
その他参考となる事項（希望事項も含む）	夏の学校では、例年遠方からの参加者に対し旅費補助をおこなっております。夏の学校での参加者アンケートによりますと、所属機関から一部でも費用を出してもらえる学生は全体の5割、全額補助はさらにその5割という結果があり、夏の学校からの旅費補助の必要性を強く示しています。 今年度の夏の学校では、史上初の400人を超える参加者が集まり、またその規模を賄えるホテルを選んだ結果開催地が都市部から遠くなったため、127人の旅費補助を希望する参加者の個人負担額は16000円となりました。 貴研究機関から頂く補助金は夏の学校の安定した運営には欠かせないものとなっています。来年度以降も継続的なご支援をいただければ幸いです。最後になりましたが、貴研究機関の援助に対して深く感謝申し上げます。